

# 渡良瀬遊水地自然学習の現状と展望

長 濱 元\*

## はじめに

本論文は渡良瀬遊水地周辺地域における遊水地関連の学習活動の歴史と現状を踏まえて、それらが近年および今後の社会環境の変化の中で、どのように促進され、組織化されていくことが望ましいか、どのような期待が持てるのかについて検討するものである。渡良瀬遊水地に関する学習活動の現状を分析し考察と展望を述べる。

また、この研究は東洋大学井上円了研究センターの助成による地域活性化研究所の研究事業のひとつとして実施している研究成果の一部である。

## 1. 渡良瀬遊水地の成立と地勢的位置付けの概要

渡良瀬遊水地は約100年ほど前に建設が始まり、多くの年月をかけて現在の姿に変えられてきた人工の構造物である。その経緯の詳細は別の機会に譲るとして、明治期以降の日本の治水政策の進展、この地域について言えば利根川と渡良瀬川の度重なる洪水被害の防止、このことは首都東京とその近郊を水害から守ることでもあった。また、近代的産業振興の一翼を担う足尾銅山を原因とする鉍害被害の抑止という2つの大きな課題が背後にあったのである。

最も大きな自然の改変は藤岡台地を掘削して、台地の西側を流れていた渡良瀬川を台地東側に導き、そこに存在していた赤麻沼に流れ込むよう川筋を大きく変えてしまったことである。その結果、渡良瀬川を流れ下る土砂が赤麻沼、その他の池沼に堆積して内水面が消失し、ヨシ原や平原に変わっていくという現象が進行した。

遊水地としての第一の役割は、洪水時には渡良瀬川流域の増水分を貯水するのみならず、利根川の増水部分を遊水地に逆流させ、利根川本流の決壊を防止することにある。洪水防止のための治水施設であることが本来の役目である。

また、渡良瀬遊水地の成立に関しては、渡良瀬川の最上流部に位置し、明治期以降国内有数の銅山であった足尾銅山の鉍害対策との関係も指摘できる。銅の生産量の拡大に伴う大量の鉍碎や精錬の廃液などが大雨の際に防護施設の破壊により渡良瀬川に流れ込み、それが流域の人間の身

---

\* 東洋大学名誉教授：Professor Emeritus, Toyo University

地域活性化研究所客員研究員：Visiting Researcher, Regional Vitalization Institute

体や農作物にしばしば多大の被害を与えた。さらに煙害が広がり足尾山地の緑が失われ、はげ山が広がるということも渡良瀬川を暴れ川とする原因にもなっていた。以上のような鉱害対策も含めて、治水上の必要性から渡良瀬遊水地の建設が進められたのである。

渡良瀬遊水地は関東平野の中央部、渡良瀬川と利根川の合流地点のすぐ上流にあり、そこは山地と平地との境界近くでもあり、関東平野の要の位置を占め、首都東京の治・利水対策の一翼を担っているのである。

## 2. 自然資源としての渡良瀬遊水地の概要と価値

渡良瀬遊水地は前述のように人工の構造物であり、「東洋一の（人工の）遊水地」と呼ばれるように33 km<sup>2</sup>に及ぶ広大な敷地にはさまざまな動植物が生息し、人手による改変を受けながらも、一定の生態系を創り出し、自然のままに遷移している部分もあって、ひと塊りの人工的自然環境として独自の世界を形成している。また、環境庁が指定する絶滅危惧種が多数生息していることによる価値も高い。

また、100年を超える遊水地の歴史は以前にあった大小の池沼を埋め尽くして消滅させると同時に、湿地の減少、乾燥化による草原や柳林の拡大などを生みだしている。特産物とされているヨシも遊水地成立以前の産業としての規模は小さかったが、遊水地化による生育環境の変化により生産量が高まり、都市圏の消費の拡大ともあいまって大きな産業に成長したものである。しかし、1980年代以降は安価な輸入品に押されて衰微し、今では消滅寸前という状況に陥っている。

このように内水面漁業の衰微も含めて、自然環境の変化と産業面への影響も強くみることができ、自然と社会の学習の対象として大きな価値を持つに至っている。

## 3. 歴史・生活文化学習の対象としての渡良瀬遊水地

上述のように渡良瀬遊水地は江戸時代からの利根川の東遷事業を引き継ぐ事業の一環でもある人工の構造物としての建設の歴史の他に、足尾銅山による鉱害史としての環境問題、それに伴う田中正造を象徴とする鉱害反対運動、遊水地建設反対運動という社会史としての問題、さらに田畑への被害防止問題、内水面漁業やヨシ・スゲ・カヤなどの植物資源を原料とする加工業への影響もあり、産業面への影響も大きく、学習の課題とする問題は多様にまた豊富に広がっている。

このような渡良瀬遊水地を対象とする組織的な学習は、幾つかの民間団体によるものを除いては大きくは展開してこなかった。その理由は遊水地の整備工事が次々と計画・実施されて、管理面・安全面から耕作、ヨシ刈り、漁業などへの歴史的な権利を持つ一部の住民を除いては、遊水地内への立ち入りは容易でなかったことにもよる。谷中湖が完成してその周辺が一般に公開されるようになったのは平成3（1991）年であり、まだ20年余りの歴史しか持っていない。

渡良瀬遊水地に関する学習は足尾銅山との関連における環境問題、渡良瀬遊水地での空港開発やレジャーランド開発に対する反対運動、田中正造を象徴とする遊水地の歴史学習などが行われてきたが、渡良瀬遊水地の生物に関する学習も観察や写真撮影など、趣味や研究の延長上において任意に行われていた。一部組織的なものとしては、日本野鳥の会による野鳥の生息数調査があげられる。

また、1990 年台に入ってからには学校教育の中で環境教育が重視され、学習指導要領の改訂による具体化などにより、周辺の学校が遊水地での観察活動を実施することが増えてきた。さらに民間団体による遊水池のエコ・ミュージアム化の提案やラムサール条約湿地登録への運動に伴う、調査・観察などの活動がしばしば行われるようになった。

それらの主な学習分野をみると、生物・環境関係の分野では「野鳥」、「魚」、「昆虫」、「植物」と「遊水地の生態系」、池水の「水質検査」、歴史関係の分野では「足尾銅山の鉱害問題」、「田中正造と谷中村廃村の問題」、「遊水地の歴史」、社会・文化関係の分野では「昔の生活のようす」、ヨシ・スゲ・カヤなどを原料とする「生活用品の生産」、遊水地にあるものを利用した「小物・アクセサリづくり」などである。

表 1. 渡良瀬遊水地学習研究発表会開催状況

市町村	参加	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
	学校名	2/22	2/21	2/19	2/18	2/17	2/16	2/14	12/4	12/3	12/2	12/7
栃木市	藤岡小	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	三鴨小	○										
板倉町	板倉東小	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
	板倉中	○										
加須市	北川辺東小	○		○		○			○	○	○	○
	北川辺西小		○		○		○					
	北川辺中	○										
小山市	下生井小		○	○			○	○			○	
	寒川小				○				○			○
	中小	○				○				○		
古河市	古河第五小		○	○								
	古河第七小								○	○	○	○
野木町	新橋小			○							○	
	野木小											○
その他	渡良瀬未来基金	○										
	日本野鳥の会	○										
	東洋大学									○		
参加校数		9	5	6	4	4	4	2	5	5	6	6

(資料出所) 渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団の資料により作成

渡良瀬遊水地の自然や歴史に関する教育・学習を目的とした最初の組織的な学習は、平成14年に開始された国土交通省の利根川上流管理事務所と渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団とが共同で始めた「渡良瀬遊水地学習研究発表会」であろう。この発表会は渡良瀬遊水地周辺の小中学校が授業（環境学習・郷土学習）の一環として実施している渡良瀬遊水地関係の学習成果を持ち寄り、一堂に会して発表を行うものであり、その後毎年実施されている。その実績を表1として示す。

次に組織的に取り組んだのは、平成9（1997）年に板倉町のニュータウン敷地内に東洋大学が開設した板倉キャンパスに平成14（2002）年に学内研究施設として開設された「地域活性化研究所」が平成19（2007）年から研究事業として開始した「自然体験活動指導者養成講座」である。この事業の特長は、前記の「渡良瀬遊水地学習研究発表会」が主として小学生の学習活動を対象としているのに対し、それらを指導する学校教員と地域の住民を対象としていることである。その実績を表2に示す。

この公開講座は「渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団」との共催により、その協力を得て実施してきたものである。大学の研究事業はその性格上永続的な事業ではないので、この事業が刺激となって地元と同種の永続的な事業が発生し、成長していくことを狙いとして実施してきたものである。

表2 「自然体験活動に関する指導者養成講座」の実績表

実施時期	参加者の対象地域	実施した学習分野	参加者数（講師・スタッフを除く）
第1回 （平成19年12月1日）	板倉町のみ	1. 旧谷中村の歴史 2. 野鳥観察 3. 魚類観察	38名
第2回 （平成20年8月9日）	板倉町、 旧藤岡町、 旧北川辺町	1. 植物観察 2. 魚類観察	51名
第3回 （平成21年9月12日）	板倉町、旧藤岡町、 旧北川辺町、旧古河市	1. 植物観察 2. 昆虫観察 3. 魚類観察	47名
第4回 （平成22年9月11日）	板倉町、旧藤岡町、 旧北川辺町、旧古河市、 野木町、小山市 （南部地域）	1. 植物観察 2. 昆虫観察 3. 魚類観察	48名
第5回 （平成23年12月10日）	板倉町、旧藤岡町、 旧北川辺町、旧古河市、 野木町、小山市 （南部地域）	野鳥の学習と観察 （観察前学習の取り入れ）	36名
第6回 （平成24年9月29日）	板倉町、旧藤岡町、 旧北川辺町、旧大利根町、 旧栗橋町、旧古河市、 野木町、小山市 （南部地域）、	昆虫の学習と観察 （観察前学習の取り入れ）	3名
第7回 （平成25年9月14日）	板倉町、旧藤岡町、 旧北川辺町、旧大利根町、 旧栗橋町、旧古河市、 野木町、小山市 （南部地域）、	植物の学習と観察 （観察前学習の取り入れ）	10名

（筆者作成）

さらに、渡良瀬遊水地に生息する生物（植物、野鳥、昆虫など）に関する一般の同好者を対象とする観察会は上記の活動の以前からずっと続けられている。それらは日本野鳥の会の県レベルの組織、同じく植物や昆虫の愛好会などの組織に属する近隣のベテランのメンバーが指導者（案内人）

となって、季節的あるいは任意に開催されていたし、地域の諸団体、たとえば「渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団」、「渡良瀬未来基金」、「渡良瀬遊水地を守る利根川流域住民協議会」などが毎年定期あるいは不定期に観察会を主催したり、近隣の小学校などの観察・学習活動を支援していた。

また、近年の傾向として植物、昆虫、野鳥などの観察を案内・指導してきたそれぞれのベテランが各分野の同好会を組織化し、これまで不定期に実施してきた観察会を毎月1回特定の期日（たとえば第三土曜日など）に開催するようになり、参加メンバーの増加も見られるようになった。特に「渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団」では外部の団体（企業）の援助を得て、以前には不定期に行っていた観察会をほぼ毎月開催するほか、学習を主とする「渡良瀬遊水地環境学習講座」を平成22（2010）年度から毎年開催するようになっている。さらに栃木市がボランティア・ガイド養成を目指した「指導者養成のための講座」を平成25（2013）年度から開始している。

このような変化は平成24（2012）年に渡良瀬遊水地がユネスコにより「ラムサール条約湿地」として登録されたことが追い風となっており、各種の観察会・学習会が続々と開催されるようになっている。新しい例をあげると、平成21（2009）年に発足した藤岡町まちづくり委員会主催による活動、平成25（2013）年度に開始された小山市の施策による観察会があり、加須市のグループでも実施を開始し、今後毎年継続しそうである。

#### 4. ラムサール条約湿地登録と新しい局面

渡良瀬遊水地がユネスコにより「ラムサール条約湿地」として登録されたのは平成24（2012）年であるが、それ以前にその申請などを踏まえた国の環境政策・河川政策の新しい方向付けとして、平成21年、国土交通省関東地方整備局河川部では「南関東エコロジカル・ネットワーク形成に関する検討委員会」を発足させるとともに、その検討項目のひとつとして「南関東におけるコウノトリ・トキを指標とした河川および周辺地域における水辺環境の保全・再生方策の検討と、将来のコウノトリ・トキの野生復帰に向けた魅力的な地域づくりのための地域振興・経済活性化方策の検討」を目的とする事業を取り上げ、平成22年3月に報告書を出した。また、委員会の検討に平行して千葉県野田市に実地調査事業を委託した。

この事業については渡良瀬遊水地周辺、利根川・荒川流域の市町村が大いに関心を示し、平成22年7月には千葉、埼玉、茨城、栃木4県下の27市町村が「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」（代表幹事：野田市長、副代表幹事：小山市長、事務局：（財）日本生態系協会）を組織し、活動を開始している。

このフォーラムには平成23年5月に栃木県栃木市と茨城県東海村が新たに参加した。加入自治体数は29市町村に増えたことになる。渡良瀬遊水地周辺では群馬県板倉町が未加入であるが、関係市町村の事業が伸展してくると、渡良瀬遊水地周辺地域の活性化・まちづくり・観光振興に関してひとつの方向性と新しい課題を与えることになる。

渡良瀬周辺地域でこの関連の事業に最も熱心なのは小山市であり、平成22（2010）年度から積極的な計画を作成し、事業に取り組んでいる。次いで関心の高いのは旧谷中村を吸収合併した藤岡町を含む栃木市であるが、内部の調整に手間取り平成25（2013）年度から本格的な計画策定に取

り組みだしている。それに対して他の市・町は観光振興の看板などに活用するというレベルの関心であり、まとまった施策を打ち出そうとするところまでは進んでいなかった。しかし最近になり、板倉町、加須市が関心の度を深めているようである。

谷中湖周辺が公開されてから渡良瀬遊水地を訪れる人たちは年々増えており、「渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団」の取りまとめでは平成21・22(2009-10)年度には100万人を超えていた。しかし、平成23(2011)年3月の東日本大震災の影響によりこの年には58万人に激減したが、翌24(2012)年には回復している。(図1参照)

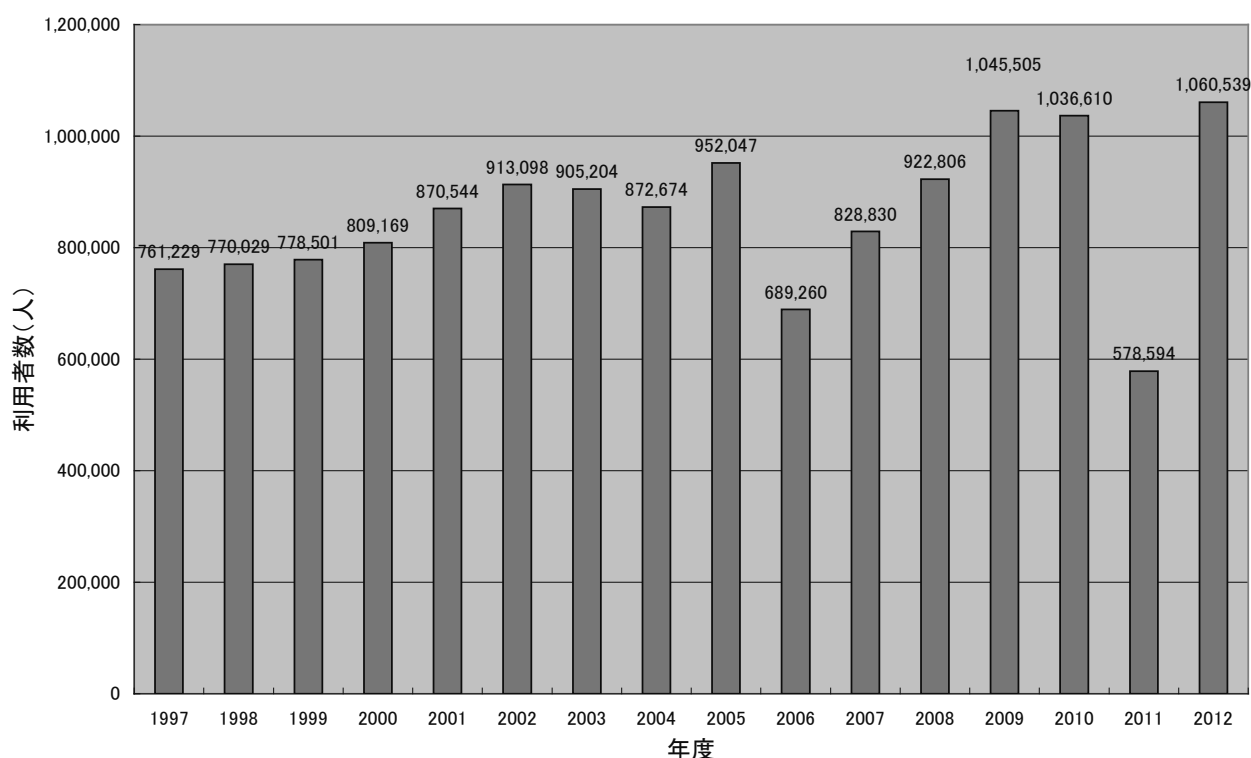


図1 渡良瀬遊水地利用者数の推移

(資料出所) (一財) 渡良瀬アクリメーション振興財団のデータにより作成。

しかし、利用者数の内訳をみると、たとえば平成21(2009)年では総数1,045,505人のうち、日常的に利用している者が495,200人でそのうち地元の人たちの利用が約15万人、その他の地域の利用者が約35万人(ほとんどがリクレーション利用)と推測される。また、イベント利用者550,305人のうち、祭・花火大会が最も多く389,600人で約70%を占めている。スポーツ活動関係が約15万人、業務・ボランティア活動が約6,000人で、残りの約6,000人が環境教育・視察等の学習を含む利用者と推測される。

渡良瀬アクリメーション振興財団によるこの利用者統計はあまり厳密ではなく、フリーで利用している人たちをかなり見逃していると思われるが、他に依拠する数値がないので、概数としてみる。それでも、花火・祭などのイベントとスポーツ目的の利用者が大半を占めており、自然観察・教育学習目的の利用者は多く見積もっても1万人には達しないレベルと言わざるを得ない。

平成24(2012)年のラムサール湿地登録以降の自然観察を目的とする訪問者は増加の傾向にあるが、その目的(意図)を「学習」とみなすのか、「観光」とみなすのかは微妙な問題である。周

辺地域の自治体や事業者には観光振興の一環としてこの傾向を歓迎し、遊水地の観光地化による経済的効果を期待する向きも大きい。

しかし、遊水地は本来は治水施設であり、「観光地」として開発するには制約も大きく、自然（環境）の保護と産業利用を重視する人たちの間には「観光地化」に反対する人たちも存在する。それらの矛盾・背反した要求をどのように調整して、遊水地の学習活動の拡大・高度化を地域の活性化に結び付けることによる、地域住民の満足度の高い未来ビジョンと実施方策を検討するという課題が横たわっている。

## 5. 渡良瀬遊水地をフィールドとする学習活動の課題

渡良瀬遊水地をフィールドとする学習活動は、遊水地のラムサール条約湿地への登録という追い風もあって、ここ1～2年増加の勢いが増している。しかし、それらのニーズに対応する条件・体制は十分ではなく幾つもの課題を抱えている。

### （1）指導者不足の問題

渡良瀬遊水地に関連して行われている学習活動の分野をみると、生物関係では「植物」、「昆虫」、「野鳥」、「魚」の4分野、環境関係では「水質調査」、「足尾銅山（鉱毒・山地緑化）」の2分野、社会・歴史分野では「田中正造（谷中村）関係」、「地域文化関係」の2分野があげられる。問題は広い視野と深い専門的知識を持った指導者数が限定されるということである。

特に社会的活動として学習指導を推進するためには、常勤の職を持っている人たちは時間的な制約が大きいので、ある程度の需要に応えるためには全分野合わせて数十人規模のまとまった数の指導者グループが必要であり、それは観光客を対象とするボランティア・ガイドについても同様と言える。

もちろん学校のようなレベルと規模を持った組織は不要であるが、中心となるセンターと上級指導者（ガイド）および中・初級の指導者（ガイド）を養成するシステムをそれぞれ創設することが課題となる。

### （2）学習環境・施設の問題

渡良瀬遊水地の自然や環境について学習会・講習会・シンポジウムなどを開催する場合に使用できる施設は、周辺の学校・公民館などを除くと栃木市藤岡町に所在する「遊水池会館」（大会議室収容者数170人）が少し規模が大きい程度で、その他の施設としては、（一財）渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団が設置している「湿地資料館」、加須市北川辺道の駅に所在する「北川辺スポーツ学習館」、板倉町の「渡良瀬自然館」を初めいずれも小規模な施設である。

平成25年の4月になって遊水地の「こども広場」内に、規模はそれほど大きくはないが、「体験学習施設『わたらせ』（収容人員100名）」がオープンし、室内学習活動の場として、また野外体験活動の拠点として利用できるようになった。有料ではあるが貸し出し用の諸器具、シャワー設備なども備わっており、学習環境の面では大変便利になった。

遊水地の内外にはスポーツ施設はある程度存在しているが、その質と使い勝手についてはまだ改善の必要がある。それらの利活用についても検討することが必要であろう。

### （3）学習内容・参考文献等の問題

渡良瀬遊水地には数多くの生物が生息し、動植物の絶滅危惧種も多数記録されている。また、その33平方キロメートルという広大な敷地は複雑な生態系を形成しており、学習・研究の内容には事欠かない。



写真1 社会人対象の体験観察講座  
(平成19(2007)年度実施)



写真2 板倉東小学校の体験学習授業  
(平成14(2002)年度実施)

生物の4分野については、「(一財)渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団」がそれぞれの分野で図鑑、ハンドブックなどを発行しており、渡良瀬遊水地の環境問題や歴史、今後の在り方などについては「同財団」や「渡良瀬遊水地を守る利根川流域住民協議会」がそれぞれ書籍を発行している。

周辺地域の郷土史の研究も盛んに行われてきており、それらの資料(史料)も印刷物・写真として入手可能である。インターネット上にも公私の多様な情報が提供されている。

以上のような内容・資料をどのように有機的・体系的に利用できる体制を整えていくかということが課題として出てくるであろう。

#### (4) 地域住民の意識・活動の問題

渡良瀬遊水地周辺の4市・2町には現在合わせて64万人の住民が居住しているが、日常生活の中で渡良瀬遊水地に関心を持ち、散策・観察・スポーツ利用などに親しんでいる人たちは意外と少ない。遊水地は一部の人たちを除いて、花火大会や地域団体のスポーツ大会などのイベントは別として、日常生活との関連はほとんど無い存在となっている。ラムサール条約湿地に登録されたことにより、自治体が盛んにPRするようになったので、多少の認知度は上がっているが、「ラムサール?それってな〜に」という人も多い。

遊水地の中に農耕地を持ち、ヨシその他の資源を利用して所得を得ている人たちもいるので、湯水池の状況には非常に関心の高い人たちもいる。しかし、地域全体としては必ずしも関心・認知度が高いとは言えない。ラムサール条約湿地登録以来、自治体の中では小山市のように熱心に取り組むところも出ているので、関係する地域での認識・関心は徐々に高まり、関係する活動も増加すると思われる。

#### (5) 自治体の施策とビジョン・基盤形成の問題

渡良瀬遊水地を地域活性化あるいは観光振興の対象として活用しようとする施策については、周辺自治体の中では小山市が最も先行しており、市として体系的な計画を作成し、実施する段階に達



している。

また、渡良瀬遊水地の敷地の71.2%を占める栃木市においては、合併した旧藤岡町が最も直接的な関係が深く、遊水地にかかわる利害関係者も多いことからなかなか意見がまとまらず、平成25（2013）年度に入り、ビジョンづくりと指導者の養成に取り掛かったところである。

その他の2市・2町においては、遊水地のラムサール条約湿地登録を観光振興の看板として掲げてはいるが、具体的な施策までは手がまわらず、今までのところは様子見の状況であった。しかし、平成25（2013）年8月に国土交通省の利根川上流河川事務所と周辺の4市・2町が関係者を糾合して「渡良瀬遊水地保全・利活用協議会」を立ち上げたので、今後は全体的な観点も踏まえて具体的な施策の形成に取り掛かるきっかけができたといえることができる。

## 6. 渡良瀬遊水地に関する学習活動の活性化（振興）に対する動向と展望

以上のような状況を踏まえて渡良瀬遊水地をフィールドとする学習活動の活性化（振興）に対する動向と展望について考察してみたい。これまでの活動の概要は前記の「3. 歴史・生活文化学習の対象としての渡良瀬遊水地」の項で記述したが、ここではそれらの評価と今後の展望について述べたい。

### （1）児童生徒を対象とする学習・観察活動

児童生徒は学校教育（特に小学校）の中で、環境教育や郷土教育、あるいは総合学習としてこれらの内容を学んでいる。渡良瀬遊水地周辺の全ての学校が渡良瀬遊水地に特化した学習をしているわけではないが、かなりの学校が取り組んでおり、その中でも熱心な学校が学習に取組み「渡良瀬遊水地学習研究発表会」に参加している。第1回の発表会には中学校も参加していたが、その後は小学校のみの参加となっていることは残念なことである。また、一時参加校が減少傾向にあったものの近年回復傾向にあることは喜ばしい。

今後、中学校も含めて参加校が増加していくことは望ましいが、現状の発表会の方法では、場所や時間の制約から大幅な参加校の増加は難しい。渡良瀬遊水地での観察学習活動を希望する学校は増加する傾向にあるので、発表会を拡充することについてはその開催方法や形態を検討していく必要がある。また、各学校等の活動記録などを編集して、地域の学校や社会教育機関などで共有していく仕組みも効果的と考えられる。

### （2）社会人を対象とした観察会と学習講座

前述したように社会人を対象とした遊水地の観察会・講座などもさまざまな主催者の下に、公開のイベントあるいは趣味の延長としての同好者の集いとしてかなり以前から実施されていた。毎年定例的に行われていたものもある。近年の動向として指摘できることは、それらが急速に増加し、定期化され出したということである。

前述の東洋大学地域活性化研究所の「自然体験活動指導者養成講座」は上記小学生対象の学習機会が組織的に奨励されているのに対して、社会人（特に教師などの指導者）を対象とする学習講座が組織的に存在しないことを、学習組織のひとつの欠陥として認識し、その先鞭をつけるために平成19（2007）年度から開始したものである。講座の内容は解説資料を用意する他は従来の観察会とあまり変わらないレベルから始めたが、平成23（2011）年度からは、座学による学習をフィー

ルド観察と併せて実施するようにし、内容の高度化を図り、看板である「指導者養成講座」の主旨にできるだけ近づけるようにした。

このような動きに合わせて（一財）渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団が平成22（2010）年度から「渡良瀬遊水地環境学習講座」を年1回開催するとともに、外部の助成を受けて主催する観察会をそれまでの年2～3回から10回程度に増加させるようになった。

また、植物、昆虫、野鳥の指導者がこれまで個人的かつ任意に開催してきたそれぞれの観察会をほぼ毎月定期的に開催するようになり、任意参加の同好会であったグループに「渡良瀬遊水地植物観察会」あるいは「渡良瀬遊水地野鳥観察会」などの名称をつけ、組織としてもきちんとした運営をするように変わってきた。

その他、各市・町関係の団体や施設（例えば、観光協会や博物館）、地元のNPO団体が独自の企画で遊水地の観察ツアーを開催することが増加している。このような学習・観察活動の活発化は喜ばしいことであるが、それらがあまりにも奔放にばらばらに実施されることは、渡良瀬遊水地周辺地域全体のためには弊害も出てくることが予想され、何らかの共通の施策、知的基盤が必要ではないかと懸念される。

### （3）学習成果、知識を確認・評価するための場の必要性（結論）

渡良瀬遊水地周辺地域は4市2町にわたっており、かなり広域的な広がりを持っている。また、近年の大型合併で4市の市域には遊水地とはあまりかわりがない地域も含まれている。しかも、それらは4県に分属しているという複雑な地域構成となっている。

このような地域において渡良瀬遊水地に関する学習観察の内容とレベルを考えた場合、それらに共通の基盤を与える知的なシステムが必要であるように思える。個々の自治体が複雑な地域事情の下に単独でそれを行うことは現状では不可能であろう。むしろ、第3者的な立場からそのようなシステムを立ち上げることがこのような事業にはふさわしいと考えられる。現在、（一財）渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団には湿地資料館が設置されているが、本研究ではそれよりはひとまわり充実した、学術的なレベルにも対応できる調査・研究施設が設置されることが望ましいとの結論が得られた。

そのような結論の下に、新しい調査研究機関が生まれるまでの準備活動として、東洋大学地域活性化研究所の「自然体験活動指導者養成講座」の実施グループでは、平成24年度からご当地検定の考え方を取り入れた「渡良瀬遊水地検定（仮称）」の研究を開始した。渡良瀬遊水地の歴史や自然に関しては前述したような資料・文献がある程度発行されており、検定問題を出題する材料はできあがっている。また、その分野の幅（裾野）の広さと学術的な内容を多く含むことから、あちこちの観光地が実施して受検者の払底に悩んでいるようなことも克服できるのではないかと予想を立てている。

しかし、その実施のためにはしっかりした実施組織・検定問題の作製が必要であり、専門家の協力・検定実施要員の確保も必要なので、数年がかりの準備を視野に入れながら研究を進めている。

従来の考え方であれば、渡良瀬遊水地の学習の振興などは、国・県・市町村などの行政にその整備を期待するところであったろうが、財政難・人口減少・少子高齢化などの難問を乗り越えていくためには、従来とは違った形でエネルギーを多くの分野の力と併せて動員していくことが重要であり、柔軟なスタイルの学習組織化を図っていかなければならない。

図2は今後の渡良瀬遊水地関連の体験学習・自然学習・環境問題および歴史と社会とのかかわりなどに関する学習と知識の形成、ならびに指導者を養成するための仕組みを考えた試案である。今後の検定試験の実施などを通して実現を目指し、関係者に働きかけていく予定である。

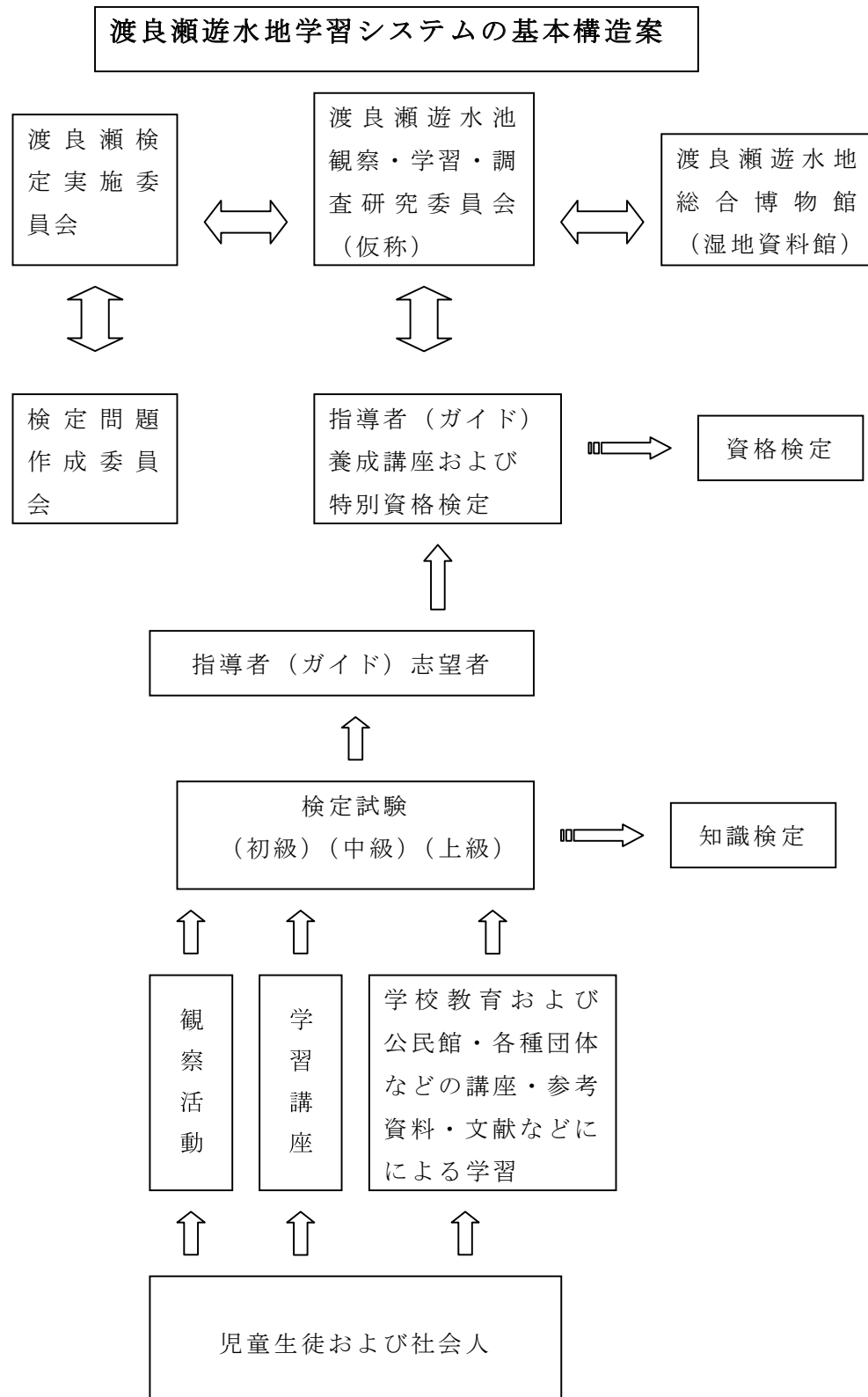


図2 渡良瀬遊水地学習システムの基本構造案

## 《参考文献》

1. 渡良瀬遊水池ラムサール条約湿地登録記録集・編集委員会編、「全記録 渡良瀬遊水池が『ラムサール条約湿地』に」、随想舎、2013年6月
2. 長濱元、「渡良瀬遊水池周辺地域活性化のための方向性と課題」、国際地域学研究第15号 pp111-131、東洋大学国際地域学部、2012年3月
3. 渡良瀬遊水池アクリメーション振興財団編集、「渡良瀬遊水池～生い立ちから現状～」、2012年3月
4. 長濱元、「渡良瀬遊水池周辺における新しい動きーラムサール条約湿地登録およびコウノトリ・トキの野生復帰事業などー」、東洋大学地域活性化研究所報 No.9 pp93-97、東洋大学地域活性化研究所、2012年2月
5. 小山市企画政策課、「小山市治水・ラムサール湿地登録・コウノトリ野生復帰促進工程表～第2調節池の掘削による治水機能の確保を優先に、ラムサール・ブランドを生かし、トキ・コウノトリの舞うふるさとづくり～」、2011年10月
6. 環境省・国土交通省利根川上流河川事務所、「渡良瀬遊水池のラムサール条約登録に関する地域住民説明会資料」、2011年9～10月
7. 長濱元、薄木三生、井上博文、竹内章悟、「市町村の連携による地域資源の活用と活性化に関する研究成果報告書（187p：分担執筆）」、東洋大学地域活性化研究所、2010年3月
8. 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、「渡良瀬遊水池湿地保全・再生基本計画ー未来へつなげよう 渡良瀬遊水池の豊かな自然と治水の働きー」、2010年3月
9. 国土交通省関東地方整備局、「南関東エコロジカル・ネットワーク形成に関する検討業務報告書平成21年度広域ブロック自立施策等推進調査、2010年3月
10. 渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会編、「新・渡良瀬遊水池」、随想舎、2005年9月

## Present Situation and Prospects of Observation and Study of Nature of the Watarase Retarding Basin

Hajime NAGAHAMA

### Summary

This paper is a tentative research of study system of nature of the Watarase Retarding Basin. The reason why the Watarase Retarding Basin is a very valuable wetland in Japan for study of natural and environmental phenomenon and those changes, in addition its social impacts and history.

The author describes its present situation of study system in the viewpoint of short history, and come to a conclusion that it is necessary to build an academic research institute no smaller than the present “Wetland Reference House”.

**Keywords** : Watarase Retarding Basin, Nature and Environment,  
Observation and Study System, academic research